

# 見本

平成26年度

## 社会情報学部小論文問題

(推薦入試)

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子と答案用紙は以下のとおりです。
  - (1) 問題冊子・・・4ページ
  - (2) 答案用紙・・・2枚
  - (3) 下書用紙・・・2枚
- 3 問題冊子及び答案用紙に、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
- 4 解答は、指定の答案用紙に記入してください。
- 5 答案用紙の所定の欄に受験番号を必ず記入してください。
- 6 試験時間中、解答した答案用紙を脇に置く場合は、不正行為防止のため答案用紙を裏返して置いてください。
- 7 答案用紙はすべて回収します。問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

東島誠著『くつながり>の精神史』では、3.11東日本大震災以後の社会づくりを日本の歴史の事例から考え直すことを試みている。その該当章の冒頭に以下のような記述がある。

幕末、安政大地震の際に江戸市中に出回った「<sup>なますえ</sup>鯰絵」には、  
地口（<sup>じぐち</sup>ダジャレ）が満面開花しています。

これって不謹慎だと思いますか？

不謹慎でないとしたらどのような説明が可能ですか？

この冒頭の文章に続いて章の後半に以下のような説明が続く。これを読んで後の問いに解答せよ。

2011年3月の東日本大震災以降、「災害ユートピア」という言葉がよく聞かれるようになった。これはレベッカ・ソルニット『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』（原著2009年）によるものがほとんどで、災害後に助け合いのコミュニティが出現することに注目が集まっている。災害以前の私なら、そうした、いかにも付け焼刃的な評論に対する批判の言葉を述べたところであろうが、その気持ちを抑え、なるべく善意に解釈しよう、という心理が働いている時点で、じゅうぶん私も「災害ユートピア」の一員である。

ただ歴史学に挑む者として言えば、「災害ユートピア」「災害パラダイス」は、すでに30年近く前から北原糸子によって論じられていたことであった。北原は言う。

災害ユートピアとはいささか逆説的表現ではあるが、簡単にいえば、災害という異常事態がもたらした非日常のなかで、日頃は願望の世界に属する一種の理想郷が出現した状態をいう。（引用は講談社学術文庫版による）

おそらくここまでであれば、昨今論じられている「災害ユートピア」ともさほどの齟齬<sup>そご</sup>(1)なく読めるだろう。だがここで言う「一種の理想郷」とは、必ずしも人びとが災害ボランティアへと向かったり、他者へのケア、つながりを求めはじめる心理を指してそう言っているわけではない。北原の言うとおりに、それは「両義性に富んだ」ものであり、現実の被災の過酷さとは正反対と言うほかない解放感、非日常性のなかで高揚した心理状態が生む、いささか不謹慎な現実謳歌<sup>おうか</sup>(2)までもがふくまれている。北原が「災害ユートピア」という言葉で捉えようとした現象とは、安政2年(1855)、江戸直下型地震である安政大地震の際に市中に出回った「鯰絵」のことである。



たしかに「鯰絵」には元気のよいものが多い。鯰に鹿島神宮の<sup>かなめいし</sup>要石<sup>(3)</sup>を打ち込んで「決め」る歌舞伎役者、地震で仕事ができたと酒盛りをする職人たち、さらには持丸長者(金持ち)に向かって富を社会に供出するよう求める鯰姿の<sup>にんきよう</sup>任侠の徒(図1)、とさまざまである。「世直し鯰の情」のように、ある鯰が被災者を倒れた柱の下から救い出し、別の鯰が足の弱った女性を背負って逃げるといった、誰にでも受け容れられるような図がある反面、<sup>じくち</sup>地口(ダジャレ)満載のおふざけも相当数あり、なかにはエセ募金としか思えない、肌も<sup>あら</sup>露わな鯰仮面の男(図2)、等々、見る人によっては不快感を催すかもしれないものも少なくない。

研究者は従来、世直し、徳政、あるいは贈与といった視点から「鯰絵」を分析してきた。だが文庫版解説を担当した木下直之が言うように、この北原の著書ほど「信用」できる本はない。なぜなら「口にするのが今なお<sup>はばか</sup>懼られるような地震直後の解放感」を説明した、唯一の研究書だからである。

北原・木下の説明でじゅうぶん<sup>いきよく</sup>委曲<sup>(4)</sup>は尽くされているとは思うのだが、それでも私には、なお一点付け加えるべきことがある。それはあらためて問えば、「あなたは、鯰絵を不謹慎だと思いませんか」という点である。

思うに地口満載の「鯰絵」を見て不謹慎だと思う人に対しては、「いまあなたはどこに

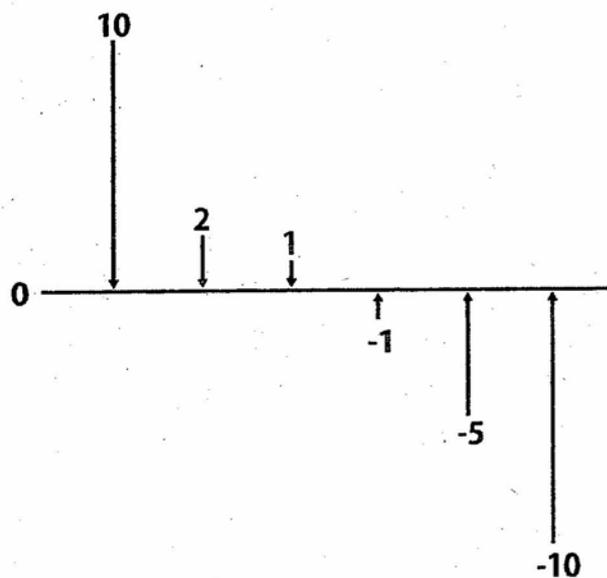


図3 鯰絵のなかのリセット願望

立っていますか」と返すことが、だいたい回答になっていると思う。簡単な図を使って説明すれば、「あなたはもともと10持っていた地点から眺めていませんか」ということである。(中略)安政大地震当時、じつに江戸市中の38万人が、「御救米」の受給対象となる「その日稼ぎの者」だったのである。安政大地震は、10であれ、ゼロであれ、マイナス10であれ、すべてが〈ゼロ〉にリセットされる、という感覚を人びともたらしたのである(図3)。卑俗な表現を用いれば、すべての貨幣が「ちゃら」になったということだ。まして江戸の圧倒的多数がゼロ付近かマイナスに分布する都市下層民衆であった、ということ念頭に置けば、

「鯰絵」の画面に<sup>あふ</sup>溢れる地口は、また違って見えてくるのではなからうか。

もちろん現実には、すべてが〈ゼロ〉になったわけではない、ということも厳然たる事

実である。多数の死者の一方で、なお多くの人が生きながら、「鯀絵」を流布させる余裕さえある。さらには、よせばいいのに、元ネタをそんなところから持ってくるかと思わせる〈判じ絵<sup>(6)</sup>〉の類も少なくない。だが、そこにはっきりとある〈富の社会還元〉の回路、「世直し」への願望が、自分の手元に10あるという地点ではなく、プラス/マイナス1程度の地点から発せられたリセット願望であるということは、あらためて考えてみるべきことであろう。

出典：東島誠著 『〈つながり〉の精神史』講談社現代新書、2012年。

\*設問の都合上、一部文章を省略した部分、図番号の変更、ルビの付加、数字の表記変更を行った個所がある。

(注)

- (1) 齟齬<sup>そご</sup>……くいちがひ。ゆきちがひ。
- (2) 謳歌<sup>おうか</sup>……声をそろえてほめたたえること。
- (3) 要石<sup>かなめいし</sup>……鹿島神宮の森の中にある石。根は深く土中にひろがる。鹿島神が天降りの時この石に座したといい、地震のしずめともいう。
- (4) 委曲<sup>いきよく</sup>……事柄のこまかな点。
- (5) 判じ絵……文字・人・物などを他のものにまぎらして書き込み、それを探させる趣向の絵。

問1 鯀絵はどのような意味で地口なのか60字以内で説明せよ。

問2 全体を要約せよ(400字程度)。

問3 東日本大震災をふまえ災害ユートピアを「肯定的」に解釈する立場から自分の見解を述べなさい(200字程度)。

問4 東日本大震災をふまえ災害ユートピアを「否定的」に解釈する立場から自分の見解を述べなさい(300字程度)。